卒業式

髙橋陽子

ここは、ぼくらのようちえん
わたくしたちのようちえん
みんなであそんだようちえん
なかよしどうしのようちえん

（「そつぎょうしき」一番　作詞　倉橋惣三）

三月十五日、大学の講堂にこの歌声が響きます。お茶の水女子大学附属幼稚園では、毎年この日に、慣れ親しんだ園舎をあとにして大学の講堂での卒業式に臨みます。

子どもたちは二年もしくは三年前に、幼稚園の遊戯室で入園式を行いました。縁あって出会ったなかまと保育者と、その日からこの幼稚園で生活を重ねてきました。幼稚園のお庭の自然、広くてまっすぐな廊下、丸みを帯びた天井の梁と重厚な木の床、ステンドグラスの窓に囲まれた遊戯室、どこにいても

守られていると感じることのできる空間の中で、繰り広げられてきた生活。この歌詞のように、自分の幼稚園なんだ、みんなで一緒に過ごしたんだ、という思いを抱いて子どもたちが卒業の日を迎えているとしたら、それは本当にうれしいことです。

こんどは、しょうがくいちねんせい
せんせいさよなら　ありがとう
みんななかよしおともだち
もいちどげんきにさようなら

（前出　二番）

晴れやかな自信たっぷりの声で「こんどはしょうがくいちねんせい」と歌い上げる子どもたちです。いつもの降園時に言う「さようなら」とは違うんだ、一緒に過ごしてきたみんなと遊んだり、みんなで集まって話を聞いたり、困っていることを伝えたり、思ったことを話したり、一緒に考えたりするのは、この日が最後の日なんだと感じてほしいと願って、歌詞を伝えてきました。

このなかまとこの空間にいるのはこの日が最後です。しかし幼稚園も先生もこれからもずっとここにいるからね、ということも伝えて、さようならをしています。

なかまと共に過ごしてきた時間をもう一度共有したいと思い「幼稚園での思い出は何？」と子どもたちに投げかけてみると、「お別れ遠足」「運動会」「ブランコ」「サッカー」など、やったことをあげていく子どもたちです。

「お別れ遠足」ということばを聞けば、場面は子どもによって違っていても、「みんなで行った最後の遠足だったな」という思いが浮かんでくるでしょう。「運動会」の中には「チームごとに力を合わせ

て走ったリレー」「クラスで気持ちを一つにした綱引き」といった「なかまと一緒にがんばった」という感覚がよみがえってくるでしょう。「ブランコ」は、「ブランコ競争」と称してなかまとどちらが高くこげるか競争したり応援しあったりしたことが心地よさとして表れていると感じられます。「ブランコ」にはもう一つの意味のある子どももいるでしょう。それは、友達と上手くいかなかった時に、一人ブランコをこいで気持ちを立て直していく、そんな場であったことを思い出す子どももいるはずです。

「サッカー」はどうでしょう。友達に一番強いと認められて、いつも中心でプレーしていた子どももいれば、チーム分けで嫌な思いをしたり、ボールを蹴ることができずにふてくされていたり、わからないうちに「レッドカード」が出され、不本意な退場をしたりしていた子どももいました。

一つひとつの出来事にこめられた思いを、私がこの場で全て代弁したり意味づけたりすることはできません。ですから一人ひとりの子どもたちに、その時その場で、必要なことを伝えていくことの大切さを改めて思うものです。一人ひとりに投げかけることばは、それを一緒に聞いているなかまを意識したことばであり、その先にみんなで一緒に考え解決することができるようになることばでもありたいものです。

幼稚園よりも大きな集団である小学校に入っていった時に、先生は信頼できる人、友達とは一緒に生活していて困難なことにぶつかっても、かかわり合って何とかしていける存在と思える気持ちをもち続けることができるのではないかと思います。

さて、なかまと一緒に大きな拍手に迎えられて講堂に入り、年長児が着席していよいよ開式です。「卒業証書授与」のことばで、ぐっと緊張感を高め

る子どもたちがたくさんいます。

クラスの半数ずつが壇上にあがり、下手側に二列で並びます。自分の名前を呼ばれると、式台の前に立ち一礼し、リボンで結ばれた円筒状の証書をいただきます。証書を受け取り一礼して上手側を向いた瞬間の、ほっとした顔。肩の力が一気に抜けるのがわかります。「フッ」とためいきをつく子どももいます。足早に自分の場所に向かい、先に終わり待っていた子どもと笑顔を交わし、今までの緊張と安堵感を分かち合っている子どももいます。

一人ひとりが精一杯手を伸ばし証書を受け取るその姿や友達と交わす表情から、二年ないし三年の生活の積み重ねを感じています。最後の一人が証書を受け取り列につくと、みんなで上手側の階段の方にからだを向けて、先頭から順におり、座席に並んで戻っていきます。

お互いを感じ合って、息を合わせている姿に、みんなで生活してきて、みんなで気持ちを合わせることの楽しさや大切さを学んできたからこその、成長を感じる瞬間でもあります。

この日を迎えるために、少しいつもの生活とは違うこともしてきていました。

十一月下旬から十二月にかけて、アルバムの表紙の絵を水彩絵の具で描きました。三月十五日卒業式の日に一人ひとりに手渡す卒業アルバムで、自分の描いた絵が自分のアルバムの表紙になっているものです。「幼稚園での思い出や、幼稚園の頃ってこんなものが好きだったんだ、とわかるような絵を描いてみましょうね」と投げかけます。「世界にたった

一つしかないものになるから、大切な気持ちで描こうね」とも伝えます。絵の具がはみ出してしまった、滲んでしまった、思ったように形がとれなかった、と言って何度も描き直す子どもがいました。その姿を見ているまわりの子どもたちからは、自然と「今度はがんばってね」と声がかかります。「一番がんばったよね」「一番すごいのができたよね」と、何枚描いても満足しきれずに終わりとなった子どもの気持ちを汲んで、声をかけていく子どももいました。

大好きな友達と同じに描こうとする子どもや、迷路を描くことが好きで線だけで構成されている絵を描いた子どもには、「自分のってわかるように、何か一工夫してみたら」と勧めてみます。線の間にしっかりと、一つ虫が描かれたこともありました。なんとかそこに、自分らしさを表現してほしい、自分にとっての幼稚園生活を思い出したり、自分は本当にはどんなことやものが好きなんだろうと向き合ったりしてほしいなと考えているのです。

絵を描くことが本当に苦手で、自信がなくてみんながいるところでは描けない子どももいました。みんなが見ていると、早く終わらせたくてささっと描いて「はい、できた」と言うのです。その時の心持ちが表れるものでもあるので「あのころの自分は、あんな子どもだった」と振り返ることはできますが、やはりしっかりと向き合って描いてほしいと願い、三歳児が降園したあとの誰もいない保育室で、ゆっくりとした空間、時間の中で描くようにした子どももいました。

どんな絵を描いたかよりも、どのように取り組んでいたかということが、思い出に残ります。

それから、三学期始業式に卒業写真を撮ります。いつもより晴れやかな服装でみんなが並ぶと、いよいよ幼稚園最後の学期になったという気持ちにさせ

られます。

二月下旬から、アルバムにはさむ絵を描いたり、アルバムに貼るネームプレートを作ったりもします。「もう少しで卒業だから、アルバムに貼るために作ってね」と声をかけると、少しでも遊びたいけれども、やらなくてはいけないことを先にやってしまった方が気持ちよく遊べるということを心得ていて、さっさっとやりこなしてしまいます。友達に「やっちゃった方がいいよ」と言っている子どももいます。これは、積み重ね以外のなにものでもありません。

子どもたちは、自主的に遊ぶ生活の中で、新入園児へのプレゼント作りやうちわ作り、てぬぐいの絵を描く、はごいたやこまを彩色するなどをしてきました。自分もやらなくてはいけないとわかっていても「あとでやる」と言い続け、本当に今日しかないという日になってやっと取り組む子どももたくさんいました。それが、卒業間近にはずいぶん変わりました。自分で生活を組み立てる、先を見通すことができるようになってきたということでしょう。

卒業式当日。子どもたちがいつもとは違う装いで登園してきました。保育室中央の机に置かれた卒業アルバムを見つけ「こうなるんだ」とうれしそうな声。自分のアルバムをしっかり見つけます。友達のも見つけて声をかけ合っています。

安心できるなかまと一緒に息を合わせて一つのことをやり遂げる楽しさ、大切さを感じることは今までに培われてきたことです。子どもたちが自分の成長を意識してこの日に臨むことができるように、また入園してきたその日から先生や友達と一緒に生活を重ねてきたことが、全てこの日に表出されるようにと願い伝えながら「卒業式」を迎えるのです。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）